

社会人一年目の彼は、仕事のちょっとした案件確認も兼ねて、女上司の浅沼と宅飲みの最中だった。

「……あふう、うふう、このお酒甘くて美味しいね」

サワーに口をつけ、可愛らしいため息を吐く。

普段は大人しめな浅沼であったが、相手が彼であるためか、あるいは酔いが回っているためか、少しだけ饒舌気味であった。仕事の話から私生活の話まで、二人は着実に親密になっていった。

彼にとっても、美人で憧れの上司である浅沼と吞めるのは大変喜ばしいことだった。ころころと笑う彼女には胸をときめかせずにはいられなかった。

そんな中、和やかなその空気を裂く出来事が……。

それは彼が同僚の佐野がゴルフカートで取引先の社長を軽くはねた話をしている最中だった。当人にとっては人事ではないが、傍から聞いてこれほど面白い話ではなかった。浅沼も手を叩いて笑っていた。

「アハハハ、何それ、スゴイね。アハハハハ」

その時、お腹に力が入ってしまったのか――。

ぷうっ！

「ハッ！」

甲高いその異音が、浅沼の臀部から響き渡る。もし彼女が笑い続けていれば、何かのラップ音と誤魔化したかもしれないが、浅沼は放屁音を最後に笑い声を止め、明らかに『やってしまった』という表情を作った。これでは自分がよからぬことをしたと喧伝しているようなものだった。

彼もその可愛らしい音はしっかり耳にしていた。浅沼が放屁してしまったのだ、と彼は理解した。

「……き、聞こえ、た？」

浅沼はその台詞がまた墓穴であるとも気づかず、そう訊ねた。

彼は「何がですか？」ととぼけようとも考えたが、こちらはこちらで『この人、やらかした』という少し強ばった表情を作ってしまったため、ここで嘘を吐くのは得策ではないと考え、静かに頷いた。

「う、ごめん……笑ったら、その……出ちゃって……」

顔を真っ赤にさせながら、もしもじと謝る浅沼。彼も本気で恥ずかしそうにしている彼女に何と言ってあげればいいか分からず、気まずい空気が広がる。

と、同時に尻から放たれた屁も広がっていき――

「……あ」

浅沼は何かに気づいたような声を漏らした。

彼女の漏らした放屁は、自分の鼻元にまで漂ってきた。しかも、その臭いといったら、鼻先で直接かまされたように錯覚するほどの、濃厚なものだったのだ。

当然、浅沼の放った屁の香りは彼の鼻腔を容赦なく刺激していた。ネットリとしていて濃厚な、腐卵成分を多量に含んだような不健康そうな臭い。仕事にかまけて私生活を疎かにした結果が、その屁に如実に現れていた。

臭いに若干顔を引き攣らせる彼を見て、浅沼は激しいショックを受け、体を震わせた。

「……ご、ごめんなさい、本当にごめんなさい……おなら、臭くて……」

浅沼は目を潤ませながら、女性としてはこれ以上ないほどに哀れな謝罪をした。ここで彼は屁のあまりの臭さに顔を引き攣らせていたことに気づき、己の浅はかさを恨みに恨む。何故、平気な顔ができなかったのか、と数秒前の自分をぶん殴ってやりたかった。

もはや室内の空気は両方の意味で最悪となっていた。気まずさとオナラの臭さがハーモニ―を奏でるように、室内を席巻していた。静かだった空気清浄機が異常な音を立てて動き出したことで、より空気は最悪になった。

こんなことで、この楽しい宅呑みをぶち壊すわけにはいかない――

錯乱した彼は、酔いも手伝ってか、元の空気を再建するための暴挙に出る。

彼は浅沼の座布団近くに思い切り顔を近づけ、タイトスカート周辺の空気を鼻で思い切り吸い込んだのだ。

「ちよつ、な、なな、何してるの、君っ!」

浅沼が驚愕するのも無理からぬ話である。鼻元に漂うガスの、それ以上の臭気を孕む尻近くの空気を嗅ぐなど、正気の沙汰ではない。自分のオナラで彼の頭がおかしくなってしまったのではないか、と浅沼は本気で心配した。

しかし、彼はいたって真剣であった。尻近くの空気を臭うことで、浅沼のオナラが臭くないということを証明し、また楽しい呑みに戻りたかった。彼はただ純粋にそれだけを考えていた。

しかし、その道はかなり険しいようだった。

予想はしていたことではあったが、尻周りの空気は彼女のガスによって目一杯汚染されており、その臭いは目に染みるほどだった。鼻にもわあつと堂々と侵入してくる腐敗ガスに、思わず鼻を摘みたくなる。視界が黄色く染まるように感じられるほどのたまごっ屁に、脳髓をかき回される心持ちだった。

しかし、彼は浅沼の生み出した最悪のため息を臭い続けた。そして、悪臭物質の

ほとんどを体内に取り込んだ後に、浅沼の放屁がまったく臭くないことを伝えた。
「そんな……やめてよ、もういいよ。だって……自分でも臭いと思ったんだよ、私のオナラ。もう……無理しなくていいから」

彼は本当にまったくこれっぽっちも臭くないということを懸命に主張したが、浅沼は悲しそうに目を伏せるばかりだった。

これではまだ足りない、とそう判断した彼は、今度は浅沼の太ももを掴んで無理矢理尻を浮かせると、彼女のタイトスカートに顔を埋めた。ならば、さらに至近距離で臭って、臭くないことを証明しようという魂胆だ。

「な、なにしてるのおっ！ ダメエッ！」

顔を朱以上に朱に染めながら、尻にへばりつく彼を引きはがそうとする浅沼であったが、彼は浅沼の腰をがっちりと掴んで離さない。ぐりぐりと臀部に顔を押しつけて、尻の割れ目の臭いを嗅いだ——そして、目をカッと見開いた。

その臭さといったらもう、鼻をもぎたくなるほどのものだった。スカートの繊維に絡みついた濃密な屁成分が、鼻腔の吸引によって彼の鼻に勢いよく流れ込む。浅沼が美人な女性であるとは思えないほどの悲惨なオナラ臭であった。プロボクサーのストレートをモロに食らったような錯覚に陥る。これでもまだ屁臭の片鱗なのだから、恐ろしい。

それでも、彼は全力でオナラの臭いを嗅ぎとった。鼻息を震わせながらも、可愛らしい上司のため、楽しい宅呑みのために、命を賭して闘うのだ。

「ああ、ヤダ、ヤダヤダ、もうやだあ……」

しかし、彼の予想に反して、場の空気は悪化を辿るばかりだった。自分の臀部に顔を押しつけられ、恥ずかしい臭いを嗅がれるという恥辱に、浅沼は身悶えるようにして震えた。

そんな彼女にさらなる試練が訪れる。

「ごろお……」
「ごろごろごろ……」

「……ッ！」

動物の唸り声のような、重たい腹の音が鳴り響く。そして、感じる確かな膨満感。肛門にかかる圧力……。

最悪のタイミングで、浅沼は強烈な放屁欲求を催してしまったのだ。

このままでは、スカート越しであるにしても、彼の顔面に放屁を浴びせてしまう……。

「ちょ、ちょっと……君……」

もじもじとお尻を揺すらせながら、浅沼は彼の顔を最悪の危険地帯から逃がそうとする。あまり乱暴なことをすると、勢いで放出されかねないので、なるだけ静かに抵抗を見せる。

しかし、彼の頭は動かない。彼は浅沼の恥を拭うべく、放屁臭の吸引に必死だったのだ。そして、どこかハイになってる部分もあり、ムチムチとした尻にさらに顔を押しつけていた。

こうなったら直接言うしかない……。

「あ、あ、あの……」

しかし、いざ言うとなると羞恥心の強い浅沼には、恥ずかしくて放屁欲求に苛まれていることを発言できない。このまま放屁すればどうなるかは分かっているというのに……。

口をもごもごとさせている間にガスはますます蓄積され、門戸開放を願うように肛門を激しくノックする。

やがて——爆発の時が訪れる。

「あ……あつ、あつ……ああっ」

背筋をピンと伸ばし、肛門をヒクヒクと痙攣させながら必死に放屁を我慢する浅沼。決壊の瀬戸際で、危うい綱渡りを続ける。

そこに彼の鼻が刺激を与える。

まるで、災厄の門をこじ開けるように、彼の鼻先は尻深くにもぐり込み——

「ああッ！ あああ——ッ！」

もはや我慢のしようなどなかった。

悲痛な声と共に、浅沼の臀部から溜まったガスが噴出する——